

建物は生き方を示してくれる『親代わり』

京町家再生研究会 理事・事務局長
小島富佐江



濱 恵介

エネルギー・文化研究所/CEL 研究主幹

■ 時を経た住宅の持つ魅力 ■

濱 今日の小島さんのご自宅にお邪魔したわけですが、季節がら襖に代えて間仕切りは簾戸が入っていたり、畳の上には藤網代が敷かれていたりして、まさに『日本家屋の夏』という趣ですね。父の生家にも似て何となく懐かしい感じがします。

小島 夏向きの建具を替えることで、家がすごく艶やかに見えるといいま

日本の住宅は、近年二五〜三〇年という短いライフサイクルで建て替えることが一般的になってしまった。だが、資源の枯渇、廃棄による汚染、温暖化など地球環境問題に直面する現代において、もはやそうした行為は許されるわけがなくなってきた。そのためには、住む人たちが建物を維持し住み続ける努力も欠かすことができない。日本の伝統的な住宅を代表する京町家では特に顕著で、住宅の維持・管理に大変な労力が必要とする。だが、そうした手間ひまを当然の生活行為として受け入れ、不便かもしれない京町家の生活を続けるための工夫をしている人たちもいる。小島富佐江さんはそうした京町家の再生を手がけているひとりだ。

一方、当エネルギー・文化研究所の濱 恵介は、関西での永住の家づくりに際し新築という道を選ばず、築後二七年の「中古住宅」を購入。廃棄物を減らし省エネルギーに取り組みなど環境に配慮しつつ修復して、「エコ住宅」に再生した。

今回は、濱が「京町家再生研究会」の理事兼事務局長である小島さんを京町家のお宅に訪ねた。

すか、みずみずしくなります。よくいろいろなところで、『京都の家は夏向きにできている』と聞くのですが、自分で住んでいても、『なるほどなあ』と思います。

濱 京都では、今でもこういう建具替えは普通なのでしょうか。

小島 少し前の家なら、よく見られたものですが、エアコンが普及しましたし、建具を替える作業というのが大変ですから、される所は少なくなっていますね。

濱 夏向きの建具は、仕切といっても光が漏れて、外の風景が何となく感じら

れるのがいいですね。また開け放した縁側から見える夏場の中庭の緑も、生き生きとしていて風情を感じます。岩の苔むした感じや、緑濃いところなどは、やはり一〇〇年という時を経たからこそ生まれるものだと思います。

小島 家族の者も見慣れているはずなのですが、祇園祭が始まる七月に入る前から九月の残暑が終わる頃までの、この建具から透けて見える庭の景色は美しく感じて、ポーツと眺めていたりすることもあります。

濱 さて、今回の対談テーマ「ロングライフ」に入って行きたいと思いが、私はロングライフとは、いわゆる「長寿」ということの今風の表現だと思います。人が長く生きることになぞらえて、ものをできるだけ長く大切に使い続ける。古いものの価値を再発見するということだと感じています。そういった意味で、京町家の再生を手がけられている小島さんとしての「ロングライフ」といえば、やはり住まわれている家まつわのお話が、一番身近なものでしょうね。

小島 実は私、生まれてから一度も京都以外の場所に住んだことがありません。家も引っ越しというのを、生まれて初めてしたのが結婚した時でした。生家も伏見の古い家で、つまり生まれてから今まで住んだのは二軒の家だけで、しかも京都の家しか知らないのです。

濱 私は、小島さんとは全く対照的ですし、生まれは関東、育ちは九州、仕事は主として東京周辺、そして今は関西に住んでいる。田舎育ちでしたので、外界への憧れが強く、少年時代には、「いつかここを飛び出してやる」という願望がありました。その指向性は都会へ出てからも変わらず、結果として三つの外国を含んで、これまで三〇軒ほどの家に住んできました。一所にじっくり住んで、地域の文化・歴史の中で味わいを深めていくというのが、私にはなかったといえます。常によそ者の仮住まいのような、つまり小島さんとは全く違った環境で過ごしてきたわけですね(笑)。

小島 私は昭和三年生まれですが、ちょうど日本経済が発展していくときに大きくなりました。景気が良くなっていったわけです。それとともに育っていった世代です。一番それを実感したのが、食卓に並んでいるものが、ものすごく変わっていったことでした。毎日、こちそうが出るようになってきました。また、着ているものも変わったような気がします。それに伴って



緑豊かな中庭は子供たちの遊び場にもなる

京町家の保存に関わるようになったわけ

濱 現在、小島さんは、「京町家再生研究会」の理事をされていて、その事務所がこちらのお宅におかれているそうですが、どういう経緯で、京町家の保存や研究会を始められたのですか。

小島 研究会が発足したときは、まだバブル期の名残のあるときでした。街中に住んでいる人たちは、このあたりはきつととてもない相続税がかかるのではという不安を常に持って暮らしていました。もしもの時には家を手放すということも身近にある問題でした。私たちにとって他人事ではない問題でしたから、なにか考えないといけないという気持ちがいっつもありませんでしたが、何をどうすればいいのかわからないままにきていました。父はなにかあれば、「この家を手放してもいい」というようなことをちらりと話したこともありましたが、そんなことはありえないと私は思っていたのです。

家も、ほとんど手が入り、例えば、最初はなかった子供部屋ができたしたりして、今は、私が小さかった頃とは、かなり変わってしまいました。

濱 結婚される時に、住む家が町家だということをご存知だったのですか。

小島 結婚する前に、町家であることは聞きました。その他に、両親と一緒に住むということも。で、それを聞いた時に私は、「そんなん普通のことやん」と思ったわけです。「別に、何も珍しいこともないし」と思いました(笑)。

濱 確かにバブルの頃の土地評価というのは、とんでもなかったですから。

小島 その頃に、京町家再生研究会の前会長が、『町家のことを、もう少しちゃんとしていきたいから、この家を本部にして、京町家の再生を考えるとをしませんか』と言ってきて下さったのです。私は、何も分からなかったのですが、『そういうことで使っていたら、どうぞ使ってください』と申し上げました。平成四年に会は発足しました。何がどのようになっていくのか皆目検討がつかなかったのですが、とにかくこの家に暮らし続けて、子どもたちを育てていきたいと強く思っていましたので、できることはなんでもやっておこうと思ったわけです。街中にある伝統的な木造の家という環境の中で、子どもを育てられるということが、他のいろいろなることを天秤にかけても、一番私にとっては、いいことではないかと思っただけです。しかし、さてこれからというときに父が亡くなりました。

濱 とうとう、心配していた相続税の話が現実になってしまったわけですね。

小島 まわりに、『相続税が大変だ』という話がいっぱいありまして、研究会でも、どうやってこの家を残すかが重要なテーマになったわけですね。濱 再び、『手放さなくてはいけない』という話が出てくるのも当然ですね。

小島 この家のことを母と話したり、親戚に話を聞いたりしたのですが、みなさん、この家を残して欲しいという。どれほどの相続税がかかるかわからないけれど、とにかく国に借金してでも何でも、この家を残そうという話になりました。研究会で、何とか残す方法はないだろうかとか検討をはじめました。それから一年くらいして、税金を申告して下さる方



にいろいろ検討を重ねていただいて、『何とかなりそうだな』という話があった時には、母と私は、二人とも舞い上がるような気になり、あちこちの親戚・友人に、『残ることになった』と電話をしました(笑)。

トヨタ財団の研究助成金を貰う

小島 その後、研究会を続けていて、ある日、主人の友達が、『小島さんは、京町家を何とか守ろうと言ってるが、やっぱりそういうものは、一回形に示してみなくてはいけないのでは』、さらに『そのために、どこからか研究費を取ってきなさい』と言われました。で、『研究費を取ってくるって、どうすればいいんですか』と聞きましたら、研究助成一覧というのを見てみればいいということで、一生懸命見ました。

濱 公共団体や企業などで、いろいろとやられていますから、数も多くて大変だったでしょう。

小島 でもいくらながめても町家の何とかで、研究費を助成してもらえないようなところはなかったんですが、何度もその一覧をながめていて、ひとつだけ、トヨタ財団だったら可能性があるかもしれないとふと思いました。『町家の保存』ということで申し込んで、ひよっとしたら助成してくれるかもしれないという位の、軽くて非常にいい加減な気持ちで申し込んだわけです(笑)。

濱 おそらく、そういう研究内容のものは、他にはなかったでしょうね。

小島 古いものを生かして使っている代表的な国にイタリアがありますが、『ひよっとして、イタリアにも行かせてくれるかもしれない』という、夢を見るようになすごく安易な気持ちで、『こいつの間に



夏向きの建具が季節の趣きを感じさせる

一度出してみようということになったわけです。それで資料を取り寄せたら、これは非常に大変そうで、大学の先生に相談しないとも私たちだけではできないと思いました。大学の先生に相談に行ったら、『もう一人の先生も加えてやりましょう』と快く引き受けて下さいました。その結果、大学の先生だけでなく、大工さんや左官さん、町家に暮らしている方々など多彩なメンバーが二〇人ほど集まって、トヨタ財団の調査に向けてのチームのようなものを立ち上げたわけです。

濱 京町家再生研究会とは別のものですか。

小島 別のものですが、ほとんどは京町家再生研究会のメンバーでした。実際、京町家再生研究会が、調査には全て関わりましたので。とりあえず、わけも分からずに申請書をトヨタ財団に出しました。それもおそれ多いことに、研究助成限度額いっぱい五〇〇万円が欲しいとお願いしたのです。

濱 トヨタ財団といえは、大変権威があるところですから、お願いするのも大変だったでしょう。

小島 その後かなりたつて出したことも忘れていた夏の終わり頃に、代表者の先生から『小島さん、嬉しい電話がかかってきたよ』と連絡がありました。私は申請したことをすっかり忘れていましたから『先生、何のことですか』と聞きまして、『トヨタ財団が一割減額なら、通してあげましょう』とのこと。私は思わず『ほんまなんですか』と言ってしまいました。

濱 四五〇万円出たわけですね。

小島 そうです。それで、『こんな嬉しいことはない』と、四人が五人で東京まで貰いにきました。後日談ですが、町家調査は賭けのようなものだったと(笑)。

濱 それで、助成金を貰って、どのようなことをされたのですか。
小島 『どうして町家が駄目なのか、町家に住んでいる人を回って聞いてくる。その結果から、町家を再生する方策を考える』というものでした。最初私たちは『行くのは五〇軒くらいかな』と言っていたのですが、ある先生が、『小島さん、せうかくするなら悉皆調査をしよう』と言われたもので、『エッ、全部行かなあかんの』と内心では思ったのですが、残っている町家全部にアンケートを送って、了解を得たところへ行ったのです。数が多く大変でしたが、結果として、いろいろな方にお目にかかれたのが、非常によかったです。

濱 反応はいかがでしたか。

小島 私もそれまで、よその町家の方とお話することなど、滅多になかったので、行って、ああだ、こうだと話をしていると、『ああ情報というの、ものすごく大事なんだな』と分かりました。家を維持していくためには様々な問題が起こってきます。修理や税金、家族のこと、でも一軒の家だけではなかなか解決できないことが多いのですが、何かそこに情報があれば少しは糸口がつかめる。その情報を何とかしたいと思いました。『この仕事は、一生続けてやらなくてはいけない』と決心したわけです。

濱 町家を維持していくために必要な情報を、共有しようということですか。
小島 そうです。そのためにはもっとネットワークをつくっておかないといけないと思います。一年目で調査をやったブロックの反対側をやりたいた、次の年に再びトヨタ財団にお願いしましたら、再度助成をしていただけました。そして念願のイタリアにも行けました。さらにそれが、京都市の京町家まちづくり調査へとつながっていったのです。

京都市の調査はかなり大掛かりになりましたが、とてもよかったと思っています。

濱 イタリアではどんな収穫がありましたか。

小島 いろいろなことを学びましたが、イタリアも一九七〇年代から歴史的な再生が始まり、それが花開いたのだということと聞き、実際にそれを見ました。まだまだ私たちの町も可能性があるんだということを強く思いました。子ども時代に見た映画のとおりにまちなみがあり、それはとてもうらやましかったです。また、街中を歩く楽しさもイタリアのいろいろな町を訪ねて感じたことです。色や照明などの配慮も日本ではまだまだ整備されていなかったもので、とてもいい勉強をしました。いろいろな方々にお目にかかることができ、再生をするための技術的なマニュアル、暮らしている人たちの意識を前向きにすることなど、たくさんヒントをいただきました。



古い建物を再生利用しているミラノの街かど

濱 イタリアに限らずヨーロッパ諸国は古い建物を大切にしていますね。数年前、私が二十代に住んでいたフランスの地方都市を久しぶりに訪ねたのですが、街の様子は当時とあまり変わっていません。新しい交通システムが入っても、歴史的街区とつまく調和しています。何百年も前からの遺産を世代から世代へ受け継ぎながら、すばらしい価値を保っていることを実感させられます。

小島 大切にものを使うという感覚をかつての日本人はしっかりと持っていたはずですが。家に限らずものを大切にすること、私は明治生まれの祖母からいろいろ教わりました。『ここまで使ったらバチは当らへん』と、ぼいと捨てずに使い尽くす姿勢です。家についても同じ考えではなかったのでしょうか。

■ 家が人をしつける

濱 そうした京町家に関わってきた小島さんにとって、家とはどのようなものなのでしょうか？

小島 家はいろいろなことを教えてくれます。何といたのですか、『やらなあかん』と思わせてくれるものです。そういう家が、今は少なくなっているのは事実です。残念ながら。

濱 家のメンテナンスとか維持には、手をかけてやるのが大事だと思います。その手始めは掃除、といわれます。自分でするのが嫌だったら、お金を払ってよその人にやってもらってもいいのですが、できるならば自分自身でやるのが一番いい。家の不具合に気が付くのです。無関心なほうたらかしが最悪のケースでしょう。でも、小島さんの場合は、掃除がもともと好きでもなかったのに、家がそうさせたという。そういうのが、やはり何百年も続いた家の力というものがあそうですね。



母屋から蔵に続く廊下も夏の装い

小島 それはあります。私は、もともと掃除は嫌いだったので、やらなければいけないのに、家がさせているのだと思います。結局、家の方にしつけてもらっている。逆に、そうしないといけなくなるような家であって欲しいと思っています。

濱 私はあちこち移り住んで、小島さんとはかなり違う生き方をしてきました。だからといって、全く違う価値観を持ったわけではなく、私も、いろんなところの体験の中から、やはり良いものを長く使わなくてはいけないというのが、一つの結論なのです。それは、どこの文明でも共通なものだと思います。



ジャカルタの古材市場(1988年)

とします。インドネシアの古材市場も思い出さずにはいけません。建物を壊すにしても部材を丁寧に取り外して再整備し、もう一度マーケットに戻すわけです。ただ、社会のあり方とか、その時代によって、新しいものをドンドン取り入れて、建設するというのが勝っている国も、時代もあつたということですが、でも、これからは日本もそれを改めて、熟成する時代になって欲しい。その中では、小島さんのお宅のような「ロングライフ」の価値が、きつと評価されて、もう少し良い世の中になるのではないかと期待しています。

小島 京都には、七九四年の遷都以来、一二〇〇年を越える長い時間があるのですから、その間にあつたことを洗いざらいさらけ出して、つき合おうのいいことではないと思いますし。これから先のことを考えるのであれば、その先にどういふものを残していかなくてはいけないのかを考えなくてはいいはずですが、もちろん今日明日のことを考えるのは、とても大事ですが、でも私たちが、これからしないといけないのは、今日明日よりは五十年百年先に、『私たちは頑張ったよ』というものを残せるかどうかだと思うのです。私は、明治時代の人たちは、そういう気概を持っていたような気がしています。我が家は明治の家ですから、この家を見ていますと、そう思います。私たちは、そういう気概をなくしてしまっている。ちょっと元気がなくなっている、それをもう少し、日本人とか、京都人とか、人間とか、どういふ言葉でもいいですけど、一人ずつ気

